



Title	普通话三音节组合中语音轻化现象实验研究
Author(s)	李, 筵
Citation	大阪大学, 2025, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/103195
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏名(李彼)
論文題名 普通话三音節組合中語音輕化現象實驗研究 (中國語三音節における音声輕化現象についての実験研究)

論文内容の要旨

音声学において、中国語普通話の音声の軽化現象は、よく取り上げられる重要なテーマの一つであり、北京方言を基礎にした普通話においても重要な言語現象である。しかし、軽声現象に関して、軽声音節に焦点を当てた研究が多い一方で、軽化現象に焦点を当てた研究は少ない。また、軽化現象について分析を行っている研究においても、二音節語の「軽読」現象に着目している研究は多いものの、三音節以上の語句における軽化現象に関して考察を行っている研究は少ない。

二音節単語の「軽読」現象に関しては、一部の学者は、単語のストレスを基に音節の軽重を区別しており、二音節語の中で、比較的軽い音節を重読音節に対する軽読音節と見なしている。また、一部の音節が軽読される現象について、既に文法構造や意味的・語用的要因の観点から分析がなされており、二音節語における軽声現象に関する研究は、ある程度体系化されていると言える。しかし、上述のとおり、音節の軽化現象に関しては、二音節単語に焦点を当てたものが多く、三音節以上の語句における軽化現象に関しての研究は少ないため、軽読現象に関しては依然として発展の余地があると言える。

そこで、本研究では、普通話の三音節句における音声軽化現象に着目し、異なる構成型の三音節句における音声軽化現象について分析を行う。具体的には、2+1型三音節句の第二音節を軽読音節と定義し、これを2+2型四音節句の第二音節と比較することで、音の長さ、音の高さ、母音の質などといった音声的要素の特徴を明らかにする。また、1+2型動詞+二音節方向補語における軽声の連続現象についても分析を行い、三音節句における軽声音節を連続で発音した際の音声的特徴を考察する。さらに、これらの異なる組み合わせの三音節句における焦点重音の位置に着目し、軽化音節を持つ三音節句の焦点重音が発音される際の音声的特徴を観察する。最後に、日本語を母語とする中国語学習者の発音の習得状況の問題点に着目し、母語話者の発音との比較研究を行うことで、中国語学習者の中国語音声軽化現象の問題点を明らかにする。また、分析結果を基に、在日中国語教育に向けて発音の教授法を提案することを試みる。本研究は全体で八章にわたる。

第一章 緒論 本章では、本研究の出発点として、普通話の音声軽化現象の現状とその問題点について指摘を行う。音声軽化現象に関する研究においては、軽読現象の定義が曖昧なまま分析が行われていることが多い。そのため、学者によって軽読現象の定義が異なっており、軽読音節の音声的特徴に関する説明には統一性が欠けている。また、日本における中国語教育においても、音声軽化現象に関する体系的かつ明確な教授方法が設計されていない。その結果、日本人学習者が、文中の「強弱のリズム（軽重緩急）」を適切に習得できないという問題が見られる。以上の問題意識を踏まえ、本研究では三音節句に着目し、北京官話地域を母語とする話者の発話データを分析することによって、音声軽化現象に関する現行の研究の不足を補うことを目指す。具体的には、2+1型の三音節句における軽読音節と、「動詞+二音節方向補語」の組み合わせの1+2型三音節句における軽声の連続発音に関する音響的特徴を比較分析することで、「軽声音節」と「軽読音節」の特徴を統合し、音声軽化現象に関して体系的な説明を行う。さらにその成果を基に、日本人学習者の習得状況を分析し、在日中国語教育に向けて、音声に関する教授法を提案することを試みる。

第二章 研究背景 本章では先行研究を概観する。「音声の軽化現象に関する研究の現状」、「音声の軽化と焦点アクセント」、「日本語母語話者による音声の軽化現象の習得状況」という三つの側面から、先行研究を整理した上で、本研究の独自性および新たな視点を提示するとともに、本研究で使用する専門用語の定義づけを行う。

第三章 2+1型三音節句における音声軽化現象 本章では、陳述文の文末における2+1型三音節句の第2音節に見られる軽読現象を対象に分析を行った。研究対象として、4つの声調の組み合わせから成る2+1型三音節句（実験群）と、

4つの声調の組み合わせから成る2+2型四音節句（対照群）を設定し、第2音節の音声的特徴について比較分析を行った。その結果、以下の音声的特徴が明らかになった。一、音の長さは短縮されるが、その短縮の程度は軽声音節ほど顕著ではない。二、音節自体の声調パターンは維持されるものの、ピッチの起点および終点の高さ、さらには音程幅に変化が生じる。三、一部の音節において母音の特性が変化し、舌の位置は中央に傾く傾向がみられる。四、軽読音節の音声軽化の程度は、該当する三音節句の使用頻度や慣用性に依存する。以上、4つの音声的特徴があることが明らかとなった。

第四章 1+2型三音節句における音声軽化現象 本章では、動詞と二音節方向補語から成る1+2型三音節句における軽声音節の連続現象を対象に研究を行った。これまでの研究では、二音節方向補語の音声軽化に関する知見が十分でなく、以下のような課題が残されていた。二音節方向補語の二つの音節はすべて軽声音節と見なされるか。二つの音節は軽化の程度に差があるのか。二つの音節が連續して軽化された場合の音声的特徴はどのようなものか。これらの問題を解明するため、本章では4つの声調から成る1+2型三音節句を対象に音声的特徴を分析した。その結果、以下のことが分かった。一、二音節方向補語の二音節は、いずれも典型的な軽声音節であり、音長が顕著に短縮される。二、二音節方向補語は本来の声調を失い、全体として連續的な下降調または中平調に変化する。

第五章 対比焦点にある三音節句の音声的特徴 中国語学界において、中国語の単語にストレス (word stress) が存在するか否かについては、いまだに議論が続いている。例えば、英語のように典型的にストレスを持つ言語では、単語が強調される場合、その単語のストレスの部分がさらに強調される。いわゆる「もともと重い部分はより重くなる」の規則である。一方、典型的にストレスを持たない中国語は、単語内部の任意の音節を強調することで単語を強調することができるため、「もともと重い部分はより重くなる」の規則には従わないとされている。本章では、この定説について検証を行う。前章で扱った三音節句を対比焦点に置くことで、軽化が生じた三音節句全体が文の対比焦点となる場合の焦点重音パターンを分析した。その結果、中国語には「もともと重い部分はより重くなる」の規則は適用されず、「軽化した音節は基本重くならない」の規則が存在することが明らかとなった。具体的には、音声軽化が発生した音節は文全体の焦点重音を担うことができない。すなわち、軽化された音節を強調する場合であっても、三音節句内部のリズム的制約が意味論的制約を上回り、軽化された音節が焦点重音として発音されることが避けられていた。本章の研究成果は、音声軽化現象が意味的および語用論的な焦点形成にどのように影響するかについての新たな視座を提供するものであり、中国語特有の音韻論的規則を明確化することができる。

第六章 日本人学習者についての音声軽化現象発音実験研究 本章では、実際の教育現場における三音節軽化現象の教授法及び中国語学習者の音声軽化現象の発音状況を検討した。まず、教科書において、三音節軽化現象がどのように扱われているかについて、教材の拼音符号表記と文法的注釈の側面から整理し、問題点を整理した。次に、大阪大学の中国語専攻高年次学習者を対象に音声実験を行い、音声軽化が発生する三音節句の発音における問題点を明らかにした。実験結果から、学習者は、軽化された音節の発音についての理解が不十分であり、各音節を完全に発音しようとする傾向が強いことが分かった。特に、2+1型三音節句を発音する際に、第2音節を軽化しようという意識がほとんどなく、軽読音節の発音が他の音節より重くなる例も観察された。また、一部の学習者においては、第二音節の後に余計なポーズを挿入するなど、リズムの乱れが見られた。1+2型三音節句については、音の長さについての分析結果から、軽声音節を意識的に短く発音する傾向が見られた。この実験結果から、中国語学習者には、具体的にどの音節をより短く発音すべきかについての理解が不足していることが分かる。さらに、音の高さについて、二音節方向補語の二つの音節が軽声音節となり、本来の声調を失うという特徴について十分に理解している中国語学習者は少なかった。

第七章 音声軽化現象に関する教える方法の構想。 本章では、第六章において明らかになった日本人学習者の発音上の具体的な問題点を踏まえ、実際の教育現場で使われている教材の問題点を検討し、中国語の発音に特化した参考書を参考にしながら、音声軽化現象の教授法に関する筆者自身の構想を提示した。

第八章 結論と未来の研究方向 本章では、第三章から第六章までの研究結果を総括し、普通話における音声軽化現象を連続体として体系化した。本研究では、軽読現象と軽声音節現象を統合し、音声軽化現象として一貫性のあるシステムを構築することで、現行の研究の不足点を補完し、音声軽化の変化過程をより明確かつ直感的に示した。最後に、各章の研究を振り返り、今後の研究に向けた方向性を提示した。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏名(李筱)		氏名
論文審査担当者	(職)	
	主査 准教授	中田 聰美
	副査 准教授	鈴木 慎吾
	副査 教授	林 初梅
	副査 名誉教授	古川 裕
	副査 教授	清水 政明

論文審査の結果の要旨

現代中国語の普通話における音声軽化現象とは、軽声と軽読の両者を含むものである。軽声に関しては、すでに一定の研究成果が見られるものの、軽読に関しては、研究の余地があると考えられる。また先行研究の多くは、二音節語を研究対象としており、三音節以上における音声軽化現象について、十分な研究がなされているとは言い難い。『普通话三音节组合中语音轻化现象实验研究』（『中国語三音節における音声軽化現象についての実験研究』）と題する本論文は、まさに中国語の三音節における音声軽化現象に着目した研究であり、音声学的な実験の手法を用いてデータを収集し、そのデータに基づいて分析、考察を行っている。また中国語母語話者のみならず、日本人中国語学習者に対しても実験を行い、音声軽化現象が日本人学習者の難点となり得ることを指摘し、最終的に教育上の提言も行っている。

本論文は以下の八章からなる。

第一章では、普通話の音声軽化現象に関する研究の不足点を示し、問題提起を行っている。

第二章では、音声軽化現象に関する研究の現状、音声軽化と焦点ストレス、日本人学習者による音声軽化現象の習得状況という三つの側面から、先行研究の整理、総括を行い、本論文で使用する用語の定義を行っている。

第三章では、平叙文の文末における2+1型三音節句の第二音節を研究対象とし、2+2型四音節の第二音節と比較する実験研究を行っている。実験結果より、2+1型三音節句における第二音節の軽読現象について、その音声的特徴を四点にまとめている。

第四章では、動詞+二音節方向補語から成る1+2型三音節句を研究対象として、その二音節方向補語の音声軽化現象に関する実験研究を行っている。実験結果より、二音節方向補語の音声的特徴を明らかにし、方向補語の二音節は、いずれも典型的な軽声音節であると示している。

第五章では、第三章の2+1型三音節句、及び第四章の1+2型三音節句を対象として、三音節句全体が文の対比焦点となる場合の焦点ストレスパターンに関する実験研究を行っている。実験を通じて、中国語には「本来重い部分がより重くなる」という規則は適用されず、軽化音節は基本的に重くならないことを明らかにしている。

第六章では、日本人学習者を研究対象として、2+1型三音節句及び1+2型三音節句における音声軽化現象の产出に関する実験研究を行っている。実験結果より、上級レベルの中国語専攻の学習者であっても、軽化が生じる音節の発音を十分には習得できておらず、各音節を完全に発音しようとする傾向が強いことを指摘している。

第七章では、第六章で明らかになった日本人学習者の発音上の問題点をふまえ、中国語の発音に関する参考書四冊を参照した上で、音声軽化現象の教え方に関する筆者自身の構想を提示している。

第八章では、第三章から第六章までの実験研究に基づいて、普通話における音声軽化現象を連続体として結論づけている。また残された課題についても言及し、今後の研究の方向性を示している。

中国語教育の現場において、軽声は扱うものの、軽読が取り上げられることは決して多くないと言えるだろう。また上述のように、軽読に関する研究が十分とは言えない現状から見ると、本論文は、軽声だけではなく、軽読も含めて音声軽化現象を研究対象として実験研究を行った意欲的な論文である。三音節における音声軽化現象を扱った研究と題しているものの、三音節句のすべてのパターンを網羅できているわけではないため、今後の研究に残された課題も多いが、実験研究に基づいて音声軽化現象を一つの体系として論じ、一定の説得力のある分析と、教学に対する提

言を行っている点に、学術的価値が認められる。

これらのこと総合的に判断し、本審査委員会は全員一致で、本論文が博士（言語文化学）学位を得るにふさわしい論文であると判断した。